

地球惑星科学委員会IUGG分科会IACS小委員会（第25期・第4回）議事要旨

1. 日時 令和5年8月25日（金）13:00～15:00
2. 会場 遠隔会議
3. 出席者 中村、東、青木、榎本、尾関、川村、杉浦、杉山、豊田
4. 議題

委員長から第25期第4回のIACS小委員会の議事要旨について説明があった後、以下の議題について報告及び議論を行った。

（1）IUGG2023 総会の報告（資料1）

- ・資料1に基づき、東委員長からIUGGの評議会について報告があった。主な内容は、役員選挙の結果、予算案の紹介、レゾリューション発出、次期IUGG総会の開催地にかかる投票等。
- ・次期開催地は韓国のインチョンに決定した。
- ・IUGG2023総会の参加者は5,020人だった。ドイツから958人、中国662人、米国454人、日本279人、イタリア272人、フランス、英国他105か国から参加があった。
- ・東委員長も選考委員を務めたIUGG Gold Medalは、フランスのValérie Masson-Delmotte氏が受賞し、7月15日に受賞記念講演を行った。同氏はIPCC第6次報告書ワーキンググループ1の議長を務めており、受賞記念講演ではIPCC第6次報告書の出版経緯と概要について講演した。
- ・中村委員から、名古屋市立大学の能勢氏がIAGAの執行役員に選出されたことが報告された。

（2）IACSの活動

2019年7月から2023年7月までIACSのDivision Headを務めた豊田幹事から、IACSの活動について以下の報告があった。

（2-1）Early Career Scientist Awards について

- ・2021年～2022年に出版された論文2件に対して授与された。豊田幹事は選考委員を務めたが、評価の基準として、新規性、ユニークさ、チャレンジ精神が重視された。雑誌名は評価の対象とはならず、内容に重点を置いて評価された。
- ・前は海氷に関する論文の推薦がなかったが、今回は4件あった。
- ・日本雪氷学会のメーリングリスト等で、推薦を呼びかけたが、日本からは推薦がなかった。
- ・今回は2025年2月上旬頃が推薦の締め切りと思われる。
- ・受賞しなかった場合でも、審査員が論文に目を通すので、研究成果をアピールすることができる。日本からも躊躇せず、積極的に推薦して欲しい。

（2-2）IUGG 総会（2023年ベルリンにて開催）報告

- ・2021年12月～2022年4月にセッションのコンビーナーの調整、2022年4～6月にセッションの紹介文作成、2022年10～12月に日本雪氷学会やCryolist等のメーリングリストで情宣活動とコンビーナー間での内容の調整、2023年1～2月に招待講演者の調整、2023年2月14日アブストラクト締め切り、2023年2～3月にコンビーナー間でアブストラクトの評価、2023年4～5月にプログラム構成の検

討、というスケジュールであった。豊田幹事は、海氷関係のセッションのコンビーナーを務めた。セッションとコンビーナーの調整は、主に IUGG 傘下の 8 つの協会の事務局長が担当したが、国や地域当のバランスを考慮したものであった。

- ・ IACS 単独のセッションが 15、IACS が主導する他の協会の共同セッションが 6 あった。
- ・ 中国人の参加者が多く、活気があった。
- ・ IUGG は開催期間が 10 日あり、長すぎるので短縮すべきと言う議論がある。特に IACS は短縮化に積極的。

(2-3) IACS のビジネスミーティング

・ IUGG 総会の会期中、IACS のビジネスミーティングが、2019 年のモントリオールでの IUGG 総会以来、4 年ぶりに対面で開催された。各 Division の活動報告の他、現在活動中の 3 つのワーキンググループ（4 年間でタイムリーな特定のテーマについて活動）、2 つの Standing Group（中・長期で取り組むべき課題に関する活動）、3 つの Joint Commission（IUGG の他の協会と共同で実施する活動）、5 つの Joint Body（IUGG の他協会、関連組織と合同で実施する活動）の活動について報告があった。

- ・ IACS のメンバーは、昨年から 100 人以上増えて、現在 1200 人程度。どの分野も均等に増えた。
- ・ 今後の活動としては、各 Division が 1 つ以上のワーキンググループを提案することになっており、現在 6 つのワーキンググループを立案中。豊田委員が中心となって Antarctic Marginal Ice Zone Processes に関するワーキンググループを立ち上げ中。参加を呼び掛け、20 人程度のグループで連絡を取りつつ、体制を整えているところ。
- ・ 2025 年に韓国の釜山で IACS-IAMAS-IAPSO の総会が開催される予定。近々、その準備作業が開始される見込み。
- ・ Travel grant が 1 件当たり 2000 ユーロから 3000 ユーロに増額された。
- ・ ワーキンググループ、Standing Group、Joint Commission へのサポートも 2,500 ユーロ/年、4 年間で 10,000 ユーロに増額された。
- ・ 長年 IACS の役員として IACS に貢献してきたスイスの Charles Fierz 氏が IACS の名誉会員に選出された。
- ・ IUGG 総会での優れた研究発表（口頭発表及びポスター発表の 2 件）に対して授与される Graham Cogley Award は、以前は選考委員のみが選考していたが、今回から、聴衆が推薦を行い、推薦された発表の中から選考委員が選考を行うことに変更された。
- ・ IACS の総会で、役員選挙が実施された。

(3) IUGG 分科会の活動（資料 2-1、2-2）

資料に基づき、東委員長から報告があった。以下の通り、日本人の IUGG の賞の受賞は特筆すべきである。IUGG 分科会から推薦した仲田典弘氏 (IASPEI) が IUGG の Early Career Science Award、谷口真人氏 (IAHS) が Fellow を受賞した。日本から別途推薦されていた IUGG 分科会委員の日比谷紀之氏も Fellow を受賞した。IUGG 総会の際、仲田典弘氏の受賞記念講演が行われた。

(4) 日本学術会議の動向

中村委員から以下の報告があった。

- ・ 昨年 12 月に締め切った日本学術会議の「未来の学術振興構想」は、190 件程度の提案があった。この中から十数件のグランドビジョンをまとめ、その中でできるだけ広範囲の提案を取り込むこととした。現在、査読中であるが、第 25 期中に出版予定。
- ・ 今まで学術会議の期が変わるたびに、空白期間が生じており、新しい期が始まってから委員会の設

置作業を行っていたが、国際対応の分科会・小委員会については、新しい期が始まる前に立ち上げを行うことになった。これにより、第26期は10月1日発足が可能になる。

(5) 日本雪氷学会積雪分類ワーキンググループの活動（資料3）

資料に基づき、尾関委員から報告があった。

(6) 次期 IACS 小委員会への申し送り事項

次期 IACS 小委員会の課題について議論を行い、以下を申し送り事項とすることになった。

- ・日本雪氷学会における IACS の認知度を上げるため、雪氷研究大会で関連するパンフレット等を配布する。（以前行ったことがある）
- ・ IACS の若手賞への積極的な推薦をさらに呼びかける。
- ・学生に積雪をはじめとする IACS 関連研究分野の研究に興味を持ってもらえるよう、今後さらに努力する。
- ・国内で IACS 関連のホームページを作成することを検討する。
- ・若手の人数が全体的に減っており、国際会議や観測へ参加する若手人数が減っている。観測を行う若手を増やすのははむずかしいかもしれないが、モデル研究は比較的实施しやすいので、モデルのソースコード等を研究コミュニティの共通のツールとして利用できるようにし、観測中心の研究者も利用できる体制を作ることを検討する。

(7) 次期 IACS 小委員会立ち上げ体制

- ・東委員長は2023年度末の定年退職に伴い、25期で IACS 小委員会の委員長を退任するが、26期の IACS 小委員会設置の世話人を務める予定。

(8) その他

特になし。